液体窒素浸漬冷却永久電流モード高温超電導磁石の開発 Persistent current mode HTS magnet cooled by liquid Nitrogen

<u>石川裕記</u>(東海旅客鉄道);安井竜之介(東海交通機械);根本 薫(東海旅客鉄道) <u>ISHIKAWA Hiroki</u> (CJR); YASUI Ryunosuke (CKK); NEMOTO Kaoru (CJR) E-mail: hiroki_ishikawa@jr-central.co.jp

1. はじめに

我々はこれまで沸騰液体窒素浸漬で冷却し、永久電流モ ードで運用する RE 系高温超電導磁石の基礎研究を行っ てきた。その一環として、矩形ダブルパンケーキコイルを 内蔵する超電導磁石を製作し、永久電流モード試験を実施 した。

2. 超電導線とアルミニウムテープの共巻きコイル

冷却温度 77K で最大経験磁界強度~2T を前提条件に、 超電導線材として RE 系を選択した。さらに、ハンドリン グが容易で軽量化および低コスト化に有利なことから銅 安定化層の無いフジクラ製 FYSC-S12 (幅 12mm 厚み 0.8mm)を採用することとした。絶縁処理はポリイミドを 主要材質とするテープを突合1重巻きとした。この超電導 線と同じ幅のアルミニウムテープを重ね合わせて Fig.1 に示すような大きさ 0.58×1.09m の矩形のダブルパンケ ーキコイルを巻いた。今回採用していない銅メッキ線の場 合は、標準的な銅安定化層厚みが両側 40µm であること から、アルミニウムテープの厚みもほぼ同様の 50µm と した。ダブルパンケーキコイルの断面は Fig.2 に示すよう であり、アルミニウムテープはそれぞれのパンケーキコイ ルの内周側約 1/3 の経験磁界が比較的大きい部分の超電 導線と共巻きとした。銅安定化層の無い超電導線と比重の 小さいアルミニウムテープを共巻きとすることにより、コ イルの周方向熱伝導を損なうことなく、コイルを軽量化し た。

3. 液体窒素浸漬冷却永久電流モード高温超電導磁石

Fig.1-2に示したダブルパンケーキコイル 2 組と永久電 流スイッチ(PCS)を接続してクライオスタットに組込み、 Fig.3に示すような液体窒素浸漬冷却高温超電導磁石を製 作した。Fig.4に永久電流モードの試験結果を示す。永久 電流モードにおける電流減衰は、コイルが発生する磁場強 度の変化で測定した。コイルに電流 69A(起磁力 220kAに 相当)を通電し、永久電流モードに切替えた後の 2 時間の 電流減衰から電流減衰率 0.2%/hour を算出した。この電 流減衰率は、毎日励磁・消磁を行うことを前提とする永久 電流モード高温超電導磁石に対しては、許容できる電流減 衰率と考えている。



Fig.1 Pancake-coil wound with the REBCO-wire and aluminum-tape.

4. まとめ

銅安定化層の無い RE 系超電導線とアルミニウムテー プとの共巻きによるダブルパンケーキコイルを 2 組内蔵 する高温超電導磁石を製作し、液体窒素浸漬の冷却温度 77K において励磁起磁力 220kA、電流減衰率 0.2%/hour の永久電流モード試験に成功した。



Fig.2 Cross section of double-pancake coil.



Fig.3 HTS magnet cooled by liquid Nitrogen.



Fig.4 Result of persistent current mode test of the HTS magnet.

— 1 —

液体窒素浸漬冷却 REBCO 永久電流スイッチ REBCO persistent current switches cooled by liquid Nitrogen

<u>石川裕記</u>,井上明彦(東海旅客鉄道);安井竜之介(東海交通機械);根本 薫(東海旅客鉄道) ISHIKAWA Hiroki, INOUE Akihiko (CJR); YASUI Ryunosuke (CKK); NEMOTO Kaoru (CJR)

1. はじめに

我々はこれまで沸騰液体窒素浸漬で冷却し、永久電流モ ードで運用する RE 系高温超電導磁石の基礎研究を行っ てきた。その一環として、液体窒素中でのオンオフ切替え を数分で行うことを目標とし、薄いテープ状ヒータを沿わ せた RE 系超電導線を無誘導巻きとする構成の円環型永 久電流スイッチを開発した。

2. 永久電流スイッチの構成

Table 1およびFig. 1に今回試作した永久電流スイッチの基本仕様、および外観と概念構成を示す。

オンの通電容量は組込み予定の超電導磁石の最大励磁 電流85Aと永久電流スイッチを設置する超電導磁石中央 部の磁界0.6Tをもとに設定し、オフの抵抗値は励磁回路の 保護抵抗値0.25Ωの20倍程度として設定した。超電導線は オフの抵抗値を大きくしやすいように、安定化銅層の無い RE系超電導線を採用した。

オフ→オン切替えを短時間で行えるようにするため永 久電流スイッチの形状を円環型とし、超電導線を均一に冷 却するため超電導線巻部を細くしてG-FRPの熱絶縁層で 覆う構成とした。さらに、オン→オフ切替えも短時間で行 えるようにするため、Fig.2に示すように、電流が往復す る2本の超電導線を束ね、その超電導線間にヒータを沿わ せて密着共巻きとした。

3. 試作結果

永久電流スイッチの試作試験結果をTable 2に示す。

試作機AおよびBにそれぞれ101Aおよび120A通電した ときの超電導線単位長さ当たりの平均電圧は、 0.02μ V/cm および 0.03μ V/cm ($\ll 1\mu$ V/cm) と十分小さく、試作機はい ずれも仕様値85Aより大きい通電容量を確認できた。

ヒータ出力36Wおよび23Wは、それぞれ試作機Aおよび 試作機Bのオフの抵抗値が5Ωに到達する加熱量であり、

Table 1 Fundamental performance and factor of persistent current switch.

オンの通電容量 オフの抵抗値 形状、寸法	85A@77K,0.6T//(巻込み超電導線のab面) 5Ω@94K(≥Tc) 円環型、内径×外径×幅:φ120×φ160×20mm 径方向厚:20mm	
RE系超電導線	幅:6~8mm、 安定化銅層:無し、銀保護層厚:2µm 絶縁材: フッ素コートカプトン	



Fig. 1 Overview and structure of persistent current switch.

67Wは試作機Aの温度がほぼ室温に到達する加熱量であ る。これらのヒータ出力により、試作機Aはオフ(5Ω)→オ ン(0Ω)の切替り時間が104秒およびオン→オフの切替り 時間が24秒となり、試作機Bはオフ→オンの切替り時間が 160秒およびオン→オフの切替り時間が28秒となった。

なお、試作機 B については保護抵抗 0.25Ωを並列に接続し、電流 100A を通電した状態からヒータ加熱 67W で オフに切替えて有電流遮断試験を行い、焼損や劣化などの 異常が発生しないことを確認した。

4. まとめ

オン⇔オフ切替えを短時間で行えるようにするため、 RE系超電導線にテープ状ヒータを密着共巻きとした構成 の円環型永久電流スイッチを試作した。オンオフ切替え時 間の実測結果は、いずれの試作機もオフからオンへの切替 り時間が3分以内、オンからオフへの切替り時間が0.5分 以内であることから、今回試作した永久電流スイッチはオ ンオフ切替え時間の目標を達成できたと考えている。

なお、試作機 B は本低温工学・超電導学会における発表「液体窒素浸漬冷却永久電流モード高温超電導磁石の開発」の超電導磁石に組込み、その永久電流モード運転に供した永久電流スイッチである。

Table 2 Test manufacture of persistent current switches.

	試作機 A	試作機 B
超電導線 寸法 室温抵抗値 臨界電流	幅6mm×長さ10m 8.4Ω 133A@77K,0.6T//ab面	幅8mm×長さ20m 10.8Ω 176A@77K,0.6T//ab面
通電試験時に 測定した電圧	0.02µV/cm@101A,77K,0.6T	0.03µV/cm@120A,77K,0.6T
ヒータ 寸法 室温抵抗値 出力	厚5µm×幅4mm×長さ3.8m 159Ω 36W(でオフ抵抗5Ω到達)	厚5µm×幅4mm×長さ9.5m 388Ω 23W(でオフ抵抗5Ω到達)
オフ₅Ω → オン 0Ω 切替り時間	(ヒータ36W出力停止後) 104秒	(ヒータ23W出力停止後) 160秒
オン0Ω→ オフ 5Ω 切替り時間	(ヒータ67W出力開始後) 24秒	(ヒータ67W出力開始後) 28秒



Fig. 2 Arrangement of superconducting wires, heater, former and terminals before winding.

REBCO 線材を無誘導巻きした伝導冷却型高温超電導スイッチの開発 A HTS switch composed of a non-inductive winding with REBCO coated-conductors for conduction cooling system

<u>岩井 貞憲</u>,大谷 安見,宮崎 寛史,伊藤 智庸,野村 俊自(東芝エネルギーシステムズ); <u>IWAI Sadanori</u>, OHTANI Yasumi, MIYAZAKI Hiroshi, ITO Toshinobu, NOMURA Shunji (Toshiba Energy Systems & Solutions) E-mail: sadanori.iwai@toshiba.co.jp

1. はじめに

高温超電導コイルの保護手法の1つとして、熱暴走前にコ イルが発生するフラックスフロー抵抗を利用し、コイル両端に 並列接続した微小抵抗体へ電流を迂回させる方式を提案し ている[1, 2]。本構成では、励磁時に微小抵抗への分流を防 止するため、励磁時には高抵抗にしておく必要がある。そこで 永久電流スイッチ(PCS)のようにヒーターでオン・オフを切り替 えられる高温超電導スイッチを試作した。本発表では、 REBCO線材をパンケーキ状に無誘導巻した高温超電導スイ ッチの試作結果、および伝導冷却下で動作検証した結果に ついて報告する。

2. 高温超電導スイッチの試作結果

試作した高温超電導スイッチの外観を Fig. 1 に、諸元を Table 1 に示す。本スイッチは 2 本の REBCO 線材を最内周 でハンダ接続した無誘導巻の樹脂含浸コイルとなっている。 オフ・オフの切り替え時間を短くする観点で、熱容量は小さい 方が良い。一方、励磁時には高抵抗を発生させる必要がある。 そこで、単位長さ当たりのオフ抵抗を高くするため、安定化層 が付属されていない、外表面が銀保護層の REBCO 線材を使 用した。試作した高温超電導スイッチに 0.1 A を通電した状態 で液体窒素温度 77 K まで冷却した際の、抵抗値の温度変化 を Fig. 2 に示す。92 K で超電導転移による抵抗の減少が見 られ、オフ抵抗は 100 K で設計値 10 Ωに対し 11 Ωとなり、 ほぼ一致することを確認した。

3. オン・オフ切り替え動作の検証

伝導冷却するため、高温超電導スイッチのパンケーキ端 面に高純度アルミ伝熱板を接着し、また、その上にスイッチ直 近にて温度調整用のヒーターを取り付けた。高純度アルミ伝 熱板を GM 冷凍機の冷却ステージに接続し、高温超電導スイ ッチを伝導冷却した。約 40 K まで初期冷却したのち、Fig. 3 に示すようにヒーターに 10 W を投入し、オフ状態への切り替 え動作を検証した。約 3 分で 100 Kを超えており、10 分間オ フ状態を保持した。さらに、ヒーターを切ってスイッチを再冷却 し、オン状態への切り替え動作を検証した。約 80 分で再冷却 を完了しており、試作した高温超電導スイッチが伝導冷却下 でオン・オフ動作することを実験的に確認することができた。

4. まとめ

伝導冷却下で PCS のようにヒーターでオン・オフを切り替 え可能な高温超電導スイッチを試作し、動作検証を行った。 伝導冷却下で初期温度 40 K から、約3分で100 K を超える オフ状態に、約80分でオフからオン状態に切り替えられるこ とを確認した。今後、より短時間での切り替えが求められる緊 急遮断動作についても検討を進めていく。

参考文献

- 岩井貞憲、戸坂泰造、宮崎寛史他:第92回2015年度秋 季低温工学・超電導学会講演概要集, 3A-p12 (2015)
- 2. 岩井貞憲、戸坂泰造、宮崎寛史他:第95回2017年度秋 季低温工学・超電導学会講演概要集,1A-p05(2017)



Fig. 1 HTS switch composed of a non-inductive winding with REBCO coated-conductors.

Table 1 Specifications of the HTS switch.



Fig. 2 Temperature dependence of the resistance with 0.1 A supplied to the HTS switch cooled by liquid nitrogen.

Temperature (K)



Fig. 3 Switching test result of the HTS switch under conduction cooling configuration.

— 3 —

過渡的・局所的擾乱により発生したクエンチに対して伝導冷却薄膜線材コイルを 保護可能な検出電圧・電流減衰時定数の実験的調査

Experimental study on detection voltage and current-decay time constant enabling protection

of conduction-cooled RE-123 coils against quench initiated by

transient and local thermal disturbance

羅 熙捷,井上 覚,雨宮 尚之(京大)

LUO Xijie, INOUE Satoru, AMEMIYA Naoyuki (Kyoto University)

E-mail: x-luo@asl.kuee.kyoto-u.ac.jp

1. Background

A conventional quench protection method is to monitor the voltage across the coil, if it exceeds a threshold (detection voltage), a circuit breaker is activated, and then the coil current transfers to the external dump resistor and decays exponentially with a time constant, which is equal to coil inductance / resistance of dump resistor. The conditions for successful quench protection (detection voltage, time constant for current decay, operating current, etc.) have been studied theoretically but were not well clarified experimentally for conduction-cooled RE-123 coils. In this study, we discussed the influence of detection voltage and current-decay time constant on quench protection experimentally using short pieces of sample.

2. Experimental method

The standard coated conductor fabricated by SuperPower Inc. (SCS4050) was used in this study. The procedure of experiment is as follows.

- 1. Apply magnetic field.
- 2. Control the temperature of sample to a certain value and measure the critical current.
- 3. Apply a certain current and control the temperature of sample to a certain value.
- 4. Using quench heater to initiate normal zone.
- 5. When a normal voltage over some threshold was detected, the current provided to the sample from a power supply was decayed exponentially. This procedure simulated conventional quench detection (detection voltage) and protection (using a dump resistor, where current decays with a time constant = coil inductance / resistance of dump resistor).
- 6. Measure critical current to verify if there is degradation.

The experiments were done with the procedure above varying detection voltage, time constant and so on.

3. Experimental results

Summarize of the experimental results when time constant and current were varied with detection voltage of 100 mV and 20 mV are shown in Fig. 1 and Fig. 2. In these figures, circles represent that there was no degradation after quench, and crosses represent that there was degradation after quench. There are two dot lines in each figure, one represents the limitation for a successful quench protection (no degradation after quench) and one represents the boundary where hot spot temperature is 300 K.

Using these results, it is possible to verify whether a quench protection system is suitable for an HTS coil or not. For example, if the threshold of 100 mV is allowable for detection and it costs 0.1 s for activating circuit breaker, when transition current is 100 A, we can know that if inductance / resistance is less than 3, the protection system may help coil from degradation when quench occurs, but if inductance / resistance is more than 6, it is hard to protect coil with the same system.

The results also suggest that how we can increase the current density in a coil under a certain quench protection system. For example, if we can achieve the inductance / resistance to be 1, with 100 mV threshold and 0.1 s delay, we may be able to apply

125 A to a coil safely, at which overall current density is 312.5 $A/\mathrm{mm^2}.$

Acknowledgment

This work was supported by the Japan Science and Technology Agency under the Strategic Promotion of Innovative Research and Development Program (S-Innovation Program).



導電性樹脂を用いた 6 積層 REBCO パンケーキコイルの伝導冷却試験 Test results of a stacked REBCO pancake coil with electrically conductive epoxy resin under conduction-cooled conditions

<u>宮崎 寛史</u>, 岩井 貞憲, 宇都 達郎, 草野 貴史, 伊藤 智庸, 野村 俊自(東芝エネルギーシステムズ);石井 宏尚(東芝) <u>MIYAZAKI Hiroshi</u>, IWAI Sadanori, UTO Tatsuro, KUSANO Takashi, ITO Toshinobu, NOMURA Shunji (Toshiba Energy Systems & Solutions); ISHII Hirotaka (Toshiba) E-mail: hiroshi17.miyazaki@toshiba.co.jp

1. はじめに

高温超電導コイルの熱暴走による焼損を防止する方法と して、パンケーキコイル側面に塗布した導電性樹脂を用いて ターン間を短絡させ、異常時には、導電性樹脂を介して電流 を迂回させる方法を開発している。これまで小型のパンケーキ コイルで本手法の効果を確認してきたが、より蓄積エネルギ ーが高いコイルにおいても本手法の有効性を検証するため、 内径 500 mm のシングルパンケーキコイル 6 枚を積層した 6 積層コイルを試作し、伝導冷却下にて過電流試験を実施した。 本講演では、導電性樹脂を塗布した 6 積層 REBCO パンケー キコイルの構成および伝導冷却下での通電試験結果等につ いて報告する。

2. 導電性樹脂を塗布した6積層コイル試作

Fig.1に示したシングルパンケーキコイルを6枚積層した6 積層コイルの概略図および諸元をFig.2およびTable1に示 す。REBCO 超電導線材と離形処理したポリイミドテープを共 巻し、シングルパンケーキコイルの片側に導電性樹脂を塗布 した。また、シングルパンケーキ間はFRPシートで絶縁し、内 周または外周に取り付けた金属板で各シングルパンケーキコ イルを電気的に接続している。フラックスフロー抵抗が発生し た際には、各シングルパンケーキコイル内で導電性樹脂を介 して電流を迂回させる構成とした。今回、電流密度が高い状 態で導電性樹脂の有効性を検証するため、伝導冷却下で通 電試験を実施した。

3. 伝導冷却試験

6 積層コイルを伝導冷却試験装置に組み込み、冷凍機 2 段ステージに取り付けたヒータにより、コイル温度を 40 K に保 つように制御し、過電流通電試験を実施した。コイル通電中 にフラックスフロー抵抗によるコイル電圧の発生を確認後、電 流を 1 A 刻みで増加させ、電圧が急激に上昇し、クエンチ検 出器が動作して、電源が遮断するまで通電した。ここで、クエ ンチ検出器の動作電圧は 0.1 V、検出後遮断するまでの時間 を 0.1 s に設定した。また、電流の迂回を実測することは困難 であるので、コイル中心磁場を測定し、中心磁場の変化で電 流の迂回を観測した。40 Kの通電試験結果をFig. 3 に示す。 256 A 通電時にコイル電圧が徐々に上昇し、最終的に 0.1 V を超えて、クエンチ検出器が動作し、電源が遮断した。遮断 動作前に、中心磁場が約 0.25%低下し、電流の導電性樹脂へ の迂回が観測された。また、過電流試験後、再度通電試験を 実施し、コイル n 値の低下がないことを確認した。

4. まとめ

導電性樹脂を塗布した 6 積層コイルを伝導冷却下で過電 流試験を実施し、コイル温度 40 K で電流密度 277 A/mm²、 蓄積エネルギー31 kJ という条件において、熱暴走直前に中 心磁場が 0.25%低下し、電流が導電性樹脂に迂回する現象を 観測した。また、過電流試験前後でコイル n 値の低下がなく、 導電性樹脂を用いたコイル保護方式の有効性を確認した。



Fig. 1 Photograph of impregnated single pancake coil using electrically conductive epoxy resin.



Fig. 2 Schematic drawing of a stacked REBCO pancake coil with electrically conductive epoxy resin.

Table 1 Specifications of a stacked REBCO pancake coil

-	
Tape width	4.1 mm
Tape thickness	0.15 mm
Inner diameter	501 mm
Outer diameter	567 mm
Height	30 mm
Turns per single pancakes	156
Number of pancakes	6
Inductance	0.89 H



Fig. 3 Over-current test of a stacked REBCO pancake coil with electrically conductive epoxy resin at 40 K.

— 5 —

船舶の脱磁用超伝導コイル(海底設置)の冷却 II 液体水素冷却 Refrigeration of Superconducting Coil on Seabed for Ship Magnetic Deperming II Liquid Hydrogen Cooling

<u>廣田</u> <u>惠</u> (艦磁研) <u>HIROTA Megumi</u> (Naval Ship M&UEP R. C.) E-mail: kanjiken@nmurc.com

1. はじめに

鋼鉄を主な建造材とした船舶全体を脱磁する技術に取組 んでいる。海底に平らに設置した、船影を覆う形状の超伝導コ イルシステムについて必要とする発生磁場から電線の超伝導 導体構造を設計した。当初の高温超伝導 ReBCO テープ線材 を50Kで動作する設計は製造材料費用が高騰し、これを抑制 するため動作温度を低下し、電流一磁場特性のより高い状態 での動作が必要と認めた[1]。そこで動作温度を20K とし、低 価格化が期待できる MgB₂を導体とした全体システム(電線長 1,100m)について冷媒を液体水素とした冷却諸元について計 算した。この完成システムの検討は電磁場及び冷媒の技術的 な検討に止め、電線製造技術については考慮していない。電 線設計の実証は、現時点で確立された電線の製造技術にな る短尺ケーブルについて液体水素に替わる手段の冷却による 性能試験の可能性を述べる。

2. 完成システムの冷却

1条の電線に100kAの電流を流すものとしてMgB₂を導体とした断面構造を図1に示す。このときの導体部分全体の外径 最大寸法 a=0.06m に対し、冷媒の流れる冷却管内径を b=0.08、熱侵入は液体窒素冷却の輻射シールドの効果で伝 導によるものが支配的としてW=500Wとした[2]。導体は超伝 導線材を巻付けたユニットケーブルを束ねた構造であり複雑 な表面構造を形成するため、冷却は単一種類の冷媒原料を 使用し通常多用される液体窒素による予冷のないものとした。



Unit cable: Superconducting cable elements wound on 7.5mm diameter of copper core. Heat capacity of the whole conductor (Q_{cond}) is f 4.3 kJ/deg/m.

Fig. 1. Cross-section image of deperming cable set on seabed.

動作温度 20K で平衡状態の冷却は液体水素循環 Q (L/min)によるものとする。コイル出口の冷媒温度の上昇 Δ Tに対し、内径 a 外径 b の二重管モデルの圧力損失 Δp 、摩擦抵抗 λ の効果による Δpf を下式とする計算値を図2に示す。

$Q(\Delta T) = W \times 60 \times 10^3 / (C_{\mu_2} \times \Delta T)$	C_{H_2} : Heat capacity of liquid H_2





2Kの冷媒温度上昇を許容する場合、液体水素の必要流量は 30 L/min となり圧力損失も問題ない。

室温から動作温度 20K までの導体の冷却は、熱収支の計 算(下式)から、液体窒素との熱交換で冷却した水素ガス(80K, 700L/min, 8atm)により87K まで4日間、これより液体水素3 L/min の流量によって蒸発潜熱を利用して3日間で達する。 この冷却時間は完成システムの動作準備の期間として許容範 囲である。

 $\frac{dT}{dt} = \frac{-\alpha [(T - T_{ref})C_{H2} \times g_h] + \epsilon (T_{77}^4 - T^4) \times length + W}{Qcond \times length}$

 T_{ref} : Temperature of refrigerant g_h : Gas supply. α : Heat exchange efficiency. ϵ : Radiation parameter.

3. 短尺ケーブルによる試験評価

完成システムの液体水素による冷却に替えて短尺ケーブル (140m)をヘリウムガスによって冷却し、電線の基本性能である 最大電流及び発生磁場の試験をする条件を考える。短尺ケ ーブルの導体としては入手が容易な ReBCO テープ線材とし、 20K において MgB₂線材による電線と同等電流、磁場性能が 実現できるユニットケーブル構造、寸法及び配置とし、図1を 踏襲する。

室温からの導体の冷却は液体窒素と熱交換した 80K の圧 縮ヘリウムガス(700 L/min, 8atm at rt)循環として 1.1 日で導体 温度89K に達する。次いで 10K に冷却した同一供給量のへ リウムガス循環により1日で導体温度20K に達する計算となっ た。

4. 結論

完成システムとして液体水素冷却による MgB2線材を使用した電線が低価格化、温度維持の点で実現性があり、電線設計の性能確認には ReBCO 線材及びヘリウムガス冷却による代替とできることが分かった。

謝辞 この研究の進展のため液体水素冷却を提案されたジェ ック東理社青木五男氏に感謝します。また水素冷却施設の見 学を受け入れていただいた麻生智一氏(原研)に感謝します。

- [1] Hirota, M., JSAP Spring Meeting, 2019, 10p-s224-17.
- [2] Watanabe, H. et al., 2017, *IEEE Trans. Appl. Supercond.* 27 (4), 5400205.

1970 年代の超伝導材料開発と太刀川研究室の貢献 Contributions of Prof. Tachikawa's Laboratory

in the Superconducting Materials Development in the 1970's

<u>戸叶一正</u> (NIMS) <u>TOGANO Kazumasa</u> (NIMS) E-mail: ktokano@khe.biglobe.ne.jp

1. はじめに

周知のように 1911 年に発見された超伝導の本格的応 用が始まったのは、約半世紀後の 1960 年代に入ってから である。特に 1961 年、Kunzler による Nb₃Sn 線材の磁場 中高 *J*_cの観測と[1]、それに続く高磁場国際会議(MIT) における相次ぐ高磁場超伝導マグネットの作製成功の報 告は、世界に衝撃を与えた。太刀川はその重要性をいち早 く察知し、翌 1962 年には金属材料技術研究所(現物質・ 材料研究機構)に超伝導研究室を立ち上げ超伝導線材の 開発を開始した。太刀川らは *T*_c, *H*₂ が高いものの加工性 に難があった金属間化合物超伝導体の研究にいち早く着 手し、V₃Ga、Nb₃Sn、Nb₃Al など数多くの材料を対象にして 斬新なプロセスを開発し、今日の高磁場超伝導線材発展 の礎となる重要な貢献をしてきた。本報告では、1960 年 代後期から 1980 年代初頭にかけての開発動向を、太刀川 グループの活動を中心にして振り返ってみる。

2. 表面拡散テープとブロンズ法の発明

太刀川グループの最大の功績は 1970 年のブロンズ法 の発明である[2]。しかし、発明のきっかけになったのは、 1967年、V₃Ga 表面拡散テープを開発中に発見した Cu の触 媒効果である[3]。表面拡散法自身は、1965年に GE のグ ループが Nb₃Sn テープの開発で成功していた[4]。一方、 V₃Ga に同じ手法を適用すると。Ga に富んだ非超伝導化合 物が優先的に生成されてしまう。しかし、太刀川らは銅め っきを加えて熱処理すると目的とする V₃Ga の生成が著し く促進されることを偶然発見した[3]。この Cu の触媒効 果にヒントを得て、太刀川らは V と Cu-Ga 合金との複合 体を加工、熱処理することを試み、V3Ga を固体拡散で生成 させることに成功した。米国では直ちに Nb/Cu-Sn の複合 体で同様の実験を行って Nb₃Sn の生成に成功した[5]。以 降この手法はブロンズ法と呼ばれるようになるが、硬く 脆い化合物でも安定な多芯線材の作製を可能となり、超 伝導マグネット応用にとっては画期的な発明であった。

このようにブロンズ法は V₃Ga で生まれたが、その後加 工性が良い Nb₃Sn が開発の主流になっていく。そこで太刀 川らは Nb₃Sn ブロンズ線材の弱点であった高磁場特性を 改善する目的で、種々の元素を添加する系統的な研究に 着手した。その結果、Ti 添加が高磁場特性の改善に最も 有効であることを発見した[6]。現在では実用 Nb₃Sn 線材 の殆どに Ti が添加されている。

3. ブロンズ法の改良型

ブロンズ法の最大の欠点は、Cu-Sn 合金が加工硬化す るため Sn 濃度が限定され、加工中に中間焼鈍を数多く繰 り返さなければならないことである。これを解決する手 段として、1972 年に Suenaga らは Nb/Cu 複合体を加工し て Sn を外部から拡散させるいわゆる外部拡散法を発表し ている[7]。その後も、内部拡散法、ニオブチューブ法、 ジェリーロール法、粉末法など多くの改良されたプロセ スが編み出され、現在でもプロセスの改善が進められて いる。 一方複合体でなく、溶製した Cu-Nb 合金からスタート する *in situ*法と呼ばれる方法が 1973 年に Tsuei によっ て提案された[8]。Cu-Nb 合金を強加工すると、Cu 母相内 に Nb 繊維が分散した状態が得られ、この線材に Sn を外 部から拡散させる方法である。Nb₃Sn は繊維状に分散した 形で存在するが、一定以上の体積率があれば近接効果に よって充分に大きな J_c が得られる。熊倉らはこの *in situ* 法を V₃Ga に適用し、ブロンズ線材に匹敵する overall J_c を持つことを示した[9]。さらに消耗電極型アーク溶解や 連続的な Ga 塗布によるスケールアップにも成功し、1986 年に金属材料技術研究所に設置された 18.1 T 超伝導マグ ネットの内層用線材として使われた。

4. Nb₃Al, Nb₃(Al,Ge)線材の開発

Nb₃A1, Nb₃(A1, Ge)はV₃Ga、Nb₃Snよりも高い*T_c、H_{c2}を*もつため早くから興味が持たれていた。1970年代の初頭にはMITのグループが複合法で線材を試作している[10]。しかし、化学量組成が極めて高温でしか存在しないため、 期待したような特性が得られなかった。その後、この問題 を解決するために非常に数多くの研究が行われたが、それらは原理的には二つに分類できる。

一つは複合体を構成する Nb と A1 (A1-Ge) のサイズを微 小化して反応を容易にし、低温の熱処理で化学量論組成 に近づける方法である。最初に成功したのは 1975 年イタ リアのグループで、微細化の方法としてはジェリーロー ル法を採用した[11]。その後、複合体の微細化のために、 粉末法やニオブチューブ法など多くの方法が試みられた

もう一つは高温から高速急冷する方法である。筆者ら は、Nb₃(A1, Ge)を融液から超高速急冷し、生成された非平 衡の過飽和 bcc 相を低温で微細な A15 相に変態させ、非 常に優れた高磁界特性を達成した[12]。その後、太刀川グ ループでは急冷法を連続化したビーム照射法も試みられ た[13]。なお、後に竹内らは、直接通電を利用した急熱急 冷変態法によって、工業規模の長尺 Nb₃A1 の作製に成功 し、現在も引き続き開発が進められている[14]。

- 1. J.E. Kunzler et al.: Phys. Rev. Lett. 6 (1961)
- K. Tachikawa: Proc. ICEC., 3rd p.339. Iliffe Sci. and Tech. Publ. Berlin, 1970
- 3. K. Tachikawa et al: Jpn. J. Appl. Phys. 6 (1967) 782
- 4. M.G. Benz et al: Cryogenics 3 (1965) 248
- 5. A.R. Kaufman and J.J. Pickett: J. Appl. Phys. 42 (1971) 58
- 6. 例えば浅野稔久ら:日本金属学会誌 47 (1983) 1115
- 7. M. Suenaga et al: Appl. Phys. Lett. 20 (1972) 443
- 8. C.C. Tsuei: Science : 180 (1973) 180
- 9. H. Kumakura et al: J. Less-Common Met. : 79 (1981) 181
- 10. R. Lohber et al: Appl. Phys. Lett. 22 (1972) 69
- 11. S. Ceresara et al: IEEE Trans. Magn. MAG-11 (1975) 263
- 12. K. Togano et al : Appl. Phys. Let. 41 (1982) 199
- 13. 熊倉浩明ら :日本金属学会誌 51 (1987) 465
- 14. 竹内孝夫 :工業材料 55 (2006) 78

高エネルギービーム照射を適用した Nb₃Al ならびに Nb₃(Al, Ge) 線材の作製 Fabrication of Nb₃Al and Nb₃(Al,Ge) superconducting composite tapes

by high energy beam irradiation

<u>熊倉浩明</u>, 戸叶一正, 太刀川恭治 (物材機構) <u>KUMAKURA Hiroaki</u>, Togano Kazumasa, Tachikawa Kyoji (NIMS) E-Mail:KUMAKURA.Hiroaki@nims.go.jp

1. はじめに

Nb₃Al や Nb₃(Al,Ge)は上部臨界磁界 B_{c2}が Nb₃Sn よりも 高く、強磁界マグネット用の線材として有望と考えられる。 しかしながらこれらの化合物においては、特性の優れた化 学量論組成を持つ化合物は約 1600℃ 以上の高温でのみ安 定に存在し、常温における平衡状態の化合物は化学量論組 成よりも Al がかなり少なくなっている、という問題点が ある。このため、T_cや B_{c2}の高い化合物を得ようとすれば 1600℃ 以上の高温で化合物を生成する必要があるが、こ れを通常の熱処理で行うと生成する Nb₃Al の結晶粒が著 しく粗大化し、臨界電流密度 J_cが大幅に低下してしまう、 という難点がある。B_{c2}、J_c 共に優れた線材を得るために は、高温での反応を短時間で起こさせた後に急冷し、結晶 粒の粗大化を抑制するのが有効と考えられる。 そこで筆者らは、レーザービームや電子ビームなどの高

そこで筆者らは、レーザービームや電子ビームなどの高 エネルギービーム照射を利用して Nb-Al 素線材を急加熱 ー急冷却することによって特性の優れた Nb3Al 線材の試 作を行った。本講演では主に電子ビーム照射についてその 概略を述べる。なお、レーザービーム照射については文献 [1,2]、電子ビーム照射については文献[3]ですでに発表済で あるので、詳細はこれらの文献を参照されたい。

2. 実験方法

ビーム照射する素線材(テープ)はパウダー・イン・チュ ーブ法で作製した。粒径 40µm の Nb および Al 粉末、また はこれに粒径約 1µm の Ge 粉末を加えたものを良く混合し て外径 20mm、内径 16mm の Nb 管に充填し、スウェージ ングマシンならびに平ロールを用いて厚さ約 100µm、幅 4-6mm のテープに加工した。電子ビーム照射は電子ビー ム溶接機を用いて行った。電子ビームの加速電圧は 20kV であり、ビーム電流は 5-30mA の範囲で変化させた。電子 ビーム径はテープ表面での値が 2mm となるように焦点を 合わせた。照射中に試料を 6m/分の速度でテープ長手方向 に移動させて連続的に照射した。テープのある部分が電子 ビーム照射されている時間は 0.02 秒と非常に短いが、ビ ームのエネルギー密度が高いので、瞬間的に高温まで加熱 される。照射後、いくつかの試料については 650-800℃で 100 時間のアニールを施した。

100時間のアニールを施した。 照射前後のテープの構造・微細組織を光学顕微鏡(OM) ならびに走査電子顕微鏡(SEM)で調べ、生成した相の同定 をX線回折にて行った。線材のT_cは標準的な抵抗法で測 定した。I_cは4.2K、磁界中で4端子抵抗法により測定した。 J_cは I_cを照射によって反応が起こった領域の断面積で除 して求めた。31Tまでの磁界をテープ面に平行、電流方向 に垂直に印加した。17-31Tでの測定は東北大学金属材料 研究所強磁場施設において行った。

3. 結果と考察

3-1. 構造·組織

加工直後のテープにおいては、Nb および Al は厚さが 1-2µm のファイバー状に加工されてテープ長手方向に存 在している。また Ge はテープ加工後も粒径約 0.5µm の粒 子としてテープ内に分散している。電子ビームの出力があ る臨界値以内の場合はテープ内の Al ファイバーのみが照 射によって溶融状態となって周囲の固層 Nb と反応し、照 射後もファイバー状の組織が残る。この臨界のビーム出力 は、Nb-Al テープで約 400W であった。臨界値以内の出力 で照射したテープの OM 観察(陽極酸化後)ならびに X 線回折から、照射領域には A15 型の Nb₃Al とともに正方 晶の Nb₂Al が生成していることが判った。SEM 観察から、 Nb3Al は未反応の残留 Nb ファイバーの周囲に粒状に形成 されており、Nb2Al は更にその外側に形成されているのが わかった。さらに一部のテープについて透過電子顕微鏡観 察を行ったところ、Nb3Al 結晶粒の大きさは数百 nm 程度 であり、これはアーク溶解等を用いて高温で反応させた場 合と比べて二けた程度小さく、電子ビーム照射法が結晶粒 の粗大化の抑制に有効なことがわかる。生成した Nb3Al の格子定数は 0.5185nm 前後であり、これよりほぼ化学両 論組成の Nb3Al が生成していると考えられる。

3-2. 超電導特性

電子ビーム照射後のテープの T_c はビームエネルギーが 増大するとともに急激に上昇して 200W 前後で最大値に 達し、それ以後は出力が増大してもほとんど一定値となる。 一方 J_cは電子ビームエネルギーとともに T_cよりも緩やか に上昇し、400W 近傍で最大値を取り、さらに出力が増す と J_c は急激に低下する。J_c を最大にするビーム出力が T_c を最大にする出力よりも高くなるのは、生成する Nb₃Al 化合物の量がビーム出力とともに増大するためと考えら れる。Nb-Al テープの J_c を最大にする出力 400W は、3-1. で述べたファイバー組織から凝固組織に移行する直前の 出力に一致しており、400W 以上で J_c が急激に低下するの は、Nb シースも含めたテープ全体の溶融が起こり、生成 される Nb₃Al の量が大幅に減少するためと考えられる。

照射直後の T_c は化学両論組成の Nb₃Al に比べると低い が、これは高温から急冷したために生成した Nb₃Al 結晶の 不規則性がそのまま残っているためと考えられる。そこで 照射後に低温でアニールをすると結晶の規則性が向上し、 T_c も上昇する。最適なアニール温度は 700-750°C であり、 その時の T_c (遷移開始点)は Nb-Al テープで 18.5K、 Nb-Al-Ge テープで 20.2K と、これまでに報告されている Nb₃Al および Nb₃(Al,Ge)の最高値に近い値が得られた。 Nb-Al テープについては、レーザービーム照射の場合もほ ぼ等しい T_c が得られている。

*Jc-B*特性については、照射した直後のテープでは、Nb-Al、 Nb-Al-Ge 共に *J*cは 17~18T で緩やかな極大値を取り、さ らに磁界が上昇すると低下する。この低下の仕方は Nb-Al-Geの方が緩やかであるが、これは Nb₃(Al,Ge)の方 が Nb₃Al よりも B_{c2} が高いためである。一方、照射後 700℃ でアニールしたテープでは、アニールしないテープに比べ て明らかに Jc-B 特性が改善されており、Nb-Al テープでは 23T まで、また Nb-Al-Ge テープでは~27T の高磁界まで Jc はほとんど低下しない。照射後のアニールによって高磁界 での J_c が向上するのは、アニールによって T_c が上昇しこ れに伴って B_{c2} も上昇するためである。高磁界側のKramer プロットから Bc2(4.2K)を概算すると、Nb-Al テープで~ ~31T、Nb-Al-Ge テープでは 35~40T と見積もられる。電 子ビーム照射したテープの Jcは Nb-Al テープでは 25T ま で Nb-Al-Ge テープでは 30T の磁界まで 10⁴A/cm²以上と、 通常の熱処理により得られたテープと比較して高磁界特 性が格段に優れている。同様な優れた J。特性はレーザー ビーム照射によっても得られている。また、Ti 添加した Nb3Sn 実用線材と比較しても、高磁界における J。特性はビ ーム照射したテープの方がはるかに優れていることがわ かった。

[1]	山田	穣他	低温工学	第 21 巻(1986)339-342.
[2]	山田	穰他	低温工学	第 21 巻(1986)343-347.
[3]	熊倉湾	告明他	日本金属当	全会誌第 51 巻 (1987)465-471

古河電工における A15 型化合物超電導線材の開発 Development of A15 compound superconducting wires at Furukawa Electric Co., Ltd.

杉本 昌弘, 坂本 久樹, 遠藤 壮, 伊井 秀樹, 坪内 宏和(古河電工)

SUGIMOTO Masahiro, SAKAMOTO Hisaki, ENDOH Sakaru, II Hideki, TSUBOUCHI Hirokazu (Furukawa Electric Co., Ltd.) E-mail: masahiro.sugimoto@furukawaelectric.com

1. はじめに

Nb₃Sn が Bell 研により 1954 年に発見された後、Nb₃Sn、 Nb₃Al、V₃Ga 等の A15 化合物超電導体に用いた化合物系 超電導線材は、10 T 以上の高磁界を発生する機器を実用 化するために、超電導特性の基礎評価、性能および製造性 向上といった幅広い研究開発が進められてきた^{1),2),3)}。現 在、Nb₃Sn線材は、実用線材として、様々な超電導応用機器 に使用されている。ここでは、古河電気工業株式会社(古河 電工)における A15 型化合物超電導線材(Fig.1 参照)の開 発経緯と最近の開発動向について報告する。



Fig.1. Cross-sectional views of distinctive A15 compound superconducting wires developed by Furukawa Electric Co., Ltd. (a)Stranded V₃Ga wire, (b)ITER-CS cable, (c)AI-jacketed Nb₃Sn cable, (d)High-strength Nb₃Sn Rutherford-cable, (e)ITER-CS+Vpp strand, (f)CuNi-NbTi-/Nb₃Sn wire, (g)In-situ-CuNb/Nb₃Sn wire, (h)Nb-rod-method-Cu-Nb/Nb₃Sn wire, (i)NSN-100, (j)NSS-Rec, (k)Cu-Nb/Nb₃Sn-Rec, (l)PVF-insulated Cu-Nb/Nb₃Sn wire

2. 1970年代~1980年代の開発

太刀川先生らにより、A15 化合物の持つ硬く脆く加工 が困難であるという問題点を克服した製造方法の一つで あるブロンズ法が 1967 年に発明された。1970 年代には、 数々の V3Ga および Nb3Sn の線材開発を行っており、特徴 的なものとして、55 芯の 10 μ m の V₃Ga フィラメントを有す る素線を6本、タングステンからなる中心線周囲に撚り合 わせ、インジウムで固めた後、外周部を絶縁した 0.375mm Φの V₃Ga 線材開発がある^{4),5)}。1980 年代にかけて、A15 型化合物超電導線材の歪特性が詳細に調査されたの。ブロ ンズ法を適用した Nb₃Sn 線材は、内部拡散法などの Sn 単 体(または Sn 合金)を用いる他の製造方法と異なり、高 温押出が可能であり、複合ビレットを大型化できるため 量産製造に適しており、フィラメント極細化による低交 流損失化や、ブロンズ中のスズ濃度の増大や Ti 添加によ って高磁界特性が向上するなどの特長があることに注目 した。

3. 1990年代~2000年代の開発

1990年代は、超電導応用機器に応じた要求事項を満足 するために高性能化と長尺化といった実用的な線材開発 が行われた。超電導発電機用の低交流損失タイプ、核融合 実験炉用の高銅比・高電流密度タイプ、NMR 用高臨界・ 高電流密度タイプなどの線材が開発された。2000年代は、 NMR ハイブリッドマグネットの高磁場化が進み、素線内 部に CuNi-NbTi 金属間化合物や In-situ 法 CuNb 合金と複 合化することにより、250MPa といった強い引張応力下で も使用できる高強度 Nb₃Sn 線材が開発された⁷。

4. 2010 年代の開発

2010年代に入ると、核融合実験炉(ITER 計画)、高磁場施 設、NMR などの超電導マグネットの性能向上のため、ブロン ズ法 Nb3Sn 線材に対する要求特性は、さらに高くなった。線 材構造、ブロンズ原料、Nb3Sn 生成熱処理条件の適正化に より、非銅部当り臨界電流密度を大幅に向上(約 1200A/mm²@12T,4.2K、1990 年代の約 2 倍)させた ⁷⁾。熱処 理後、適正な繰り返し曲げ歪を印加することにより、超電導特 性を向上させた、高磁場マグネット用リアクト・アンド・ワインド (R&W)型 Nb ロッド法 Cu-Nb/Nb3Sn ラザフォード導体を開発 し、東北大 25T 無冷媒超電導マグネットに適用した。また、摩 擦攪拌接合法を適用したアルミ複合 Nb3Sn 導体を開発した 8)。 昨年度は、ポリビニールホルマール (PVF) 被覆 Cu-Nb/Nb3Sn モノリス線を開発し、絶縁被覆後の臨界電流特性を向上させ る要素技術を確立した %。今年度も、各種超電導マグネットの 要求特性に応じて、さらに高い超電導特性を有する Nb3Sn 線 材の開発を進めている。

5. まとめ

古河電工は、現在に至るまで、各種超電導応用機器の要求性能を満足する実用的な Nb₃Sn 線材の開発と製造を継続している。今後、Nb₃Sn線材は、NbTi線材よりも優れた超電導性能を有する実用線材として、超電導応用機器の性能向上に応じて、その用途がさらに拡大していくと考えられる。

謝辞

当社が A15 型化合物超電導線材を開発するにあたり、故・ 太刀川恭治先生から、多大なご指導をいただきました。感謝 の意を表し、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

参考文献

- 1. 太刀川恭治:「ニオブ3・すず線材物語」,低温工学 39 (2004) 377-382.
- 2. 太刀川恭治:「金属系超電導線材[3]-Nb₃Sn線材及びV₃Ga線材 (その1)」, 低温工学 45 (2010) 88-98.
- 3. 太刀川恭治:「金属系超電導線材[4]-Nb₃Sn線材及びV₃Ga線材 (その2)」,低温工学 45 (2010) 226-237.
- Y. Furuto et. al., : "Current-carrying capacities of superconducting multifilamentary V₃Ga cables," Appl., Phys. Lett. 24 (1974) 34-36.
- Y. Tanaka et. al.,: "Multifilamentary stranded compound superconductor," *Cryogenics* 17 (1977) 233-241.
- 何えば、J.W. Ekin, "Strain scaling law and the prediction of uniaxial and bending strain effects in multifilamentary superconductors," in Filamentary A15 Superconductors, M. Suenaga and A. Clark, Eds. New York, NY, USA: Plenum, 1980, pp. 187–203.
- New York, NY, USA: Plenum, 1980, pp. 187-203. 7. 杉本昌弘ら:「ブロンズ法 Nb₃Sn 超電導線材の開発動向-素線の高 性能化と導体化-」低温工学 **47** (2012) 479-485.
- 杉本昌弘ら:「リアクト・アンド・ワインド型 Nb₃Sn 超電導線材の実用 化-要素技術開発の現状と展望-」低温工学 50 (2015) 172-179.
 M. Sugimoto et. al., : "Performance of Polyvinyl Formal Insulated
- M. Sugimoto et. al., : "Performance of Polyvinyl Formal Insulated Cu–Nb/Nb₃Sn Wires for React-and-Wind Process," *IEEE Trans. Appl. Supercond.* 29 (2019) 6001205.

— 9 —

高臨界電流密度Nb₃Sn線材の開発 Development of High *Jc* Nb₃Sn wire

川嶋 慎也, 川原田 喬生(神戸製鋼); 加藤 弘之, 村上 幸伸, 斉藤 一功(JASTEC); 荻津 透, 菅野 未知央(KEK); 小黒 英俊(東海大); 淡路 智(東北大) <u>KAWASHIMA Shinya</u>, KAWARADA Takao (Kobe Steel, Ltd.); KATO Hiroyuki, MURAKAMI Yukinobu, SAITO Kazuyoshi (JASTEC); OGITSU Toru, SUGANO Michinaka (KEK); OGURO Hidetoshi (Tokai Uni.); AWAJI Satoshi (Tohoku Uni.) E-mail: kawashima.shinya@kobelco.com

1. はじめに

当社グループは、量産に適したNb₃Sn線材として太刀川先 生発明のブロンズ法を採用し15-16Wt%の高Sn濃度ブロンズ 法Nb₃Snの量産にいち早く成功した。さらにこの成果は高磁場 NMRマグネットの開発や国際熱核融合実験炉(ITER)用コイ ル開発にも貢献している。加えて、23T以上の磁場を発生する 1GHz級の超高磁場NMRマグネット向け線材としてTS-PIT法 線材の開発を太刀川先生の協力も得ながら進め、実用的な 特性を満足することを示した。近年当社グループは、次世代 の大型加速器などへの適用を目指し、従来の開発で得られた 成果を活用し、分散Sn法Nb₃Snの開発を行っている。以下、 各製法についての性能を詳細に述べる。

2. ブロンズ法 Nb₃Sn

高磁場化での高Jc化を図る上で、Cu-Sn(ブロンズ)合金中 のSn濃度の増加、Nb₃Snの臨界磁場の向上のために、太刀川 先生発明のTi添加ブロンズを用いたNb₃Sn線材の開発を行っ た。Sn濃度増加による加工性の課題に対しては、断面設計に 加えて加工条件や焼鈍条件等のプロセス適正化によって対 応し、高Sn 濃度Cu-Sn-Ti合金を用いたNb₃Sn線材開発に成 功した。当社グループはこれらの成果を活用し、2000 年代に は22T前後の定常磁場を発生する高磁場NMRマグネットの開 発に貢献している[1]。

さらに高磁場NMR用途に開発した技術を中磁場用途ブロンズ法Nb₃Sn線材にも展開している。ITER用Nb₃Sn線材は、トロイダル磁場(TF)コイル用線材と中心ソレノイド(CS)コイル用線材の2種類があり、共に12T付近の磁場領域で使用される。

ITER用Nb₃Sn線材には15~16wt%SnのCu-Sn合金を用い、 さらにJc向上のために従来のNMR用よりもNb芯を細径化して Nb₃Sn相の反応を促進し、熱処理条件についても最適化を行 なった。4.2K, 12Tにおけるnon Cu Jc としてTFコイル用:約900 A/mm²、CSコイル用:1,177 A/mm²という、ブロンズ法としては 極めて高いJc を達成している。

3. 粉末法 Nb₃Sn

粉末法Nb₃Sn 線材は、Nb 合金チューブの内部にSn を含 む粉末(純Sn、Sn 合金、Sn 化合物)を充填し、その外周に Cu を配置したものを複数束ねた断面形状である。太刀川先 生が提案したTa-Sn粉末を用いたパウダーインチューブ法 (TS-PIT法)では、Ta およびSn 粉末をモル比6:5 の割合で 混合し、950 ℃,10 時間の溶融拡散熱処理を施した上で粉 砕しコア粉末とし、さらにNb₃Sn 生成反応を助長するCu粉末 が混合される。

商業規模に近い重量50 kg クラスのTS-PIT 法Nb₃Sn 線材 を製作し、量産性と全長での特性安定性を評価し、4.2K, 18.5T におけるnon Cu $Jc = 295 \pm 10$ A/mm²、n = 46.5 ± 1.2 という結果が得られ、長手方向での特性が均一であること を実証した[2]。また、その他の特性として残留抵抗比RRR= 289、4.2K での0.2%耐力が168 MPa であることも確認し、こ れらの特性はブロンズ法Nb₃Sn 線材と同等の値であり、TS-PIT 法Nb₃Sn線材が実用的な特性を満たすポテンシャルを持 っことを実証した。

4. 分散 Sn 法 Nb₃Sn

欧州原子核研究機構の計画する次々世代量子加速器 (Future Circular Collider (FCC))マグネット向けNb₃Snは、非 常に高いJcの線材が大量に使用される[3]。そこで当社グルー プは内部拡散法の一種である分散Sn 法Nb₃Sn 線材を選択 した。分散Sn 法は、Cu マトリクス中に複数のNb 芯が埋め込 み配置されたNb モジュールとCuマトリクス中にSn 合金が埋 め込まれたSn モジュールとを組み合わせて製作される。これ までに、Sn拡散距離低減による拡散状況の改善、Ti添加量の 制御により、4.2K, 16T におけるnon Cu Jc = 1,100 A/mm²を 達成している。今後、熱処理条件や断面設計の改善によりさ らなる高Jc化が可能と考えている。





謝辞

本研究の一部は、高エネルギー加速器研究機構(KEK)、 欧州原子核研究機構の支援(ICA-JP-0103)を受けて行ったも のである。

- T.Kiyoshi, et al.: "Operation of 930-MHz High-Resolution NMR Magnet at TML," IEEE Transaction on Applied Superconductivity," 15 (2005) 1330-1333
- [2] 財津享司ら:「Ta-Sn パウダー・イン・チューブ法 (Nb,Ta)3Sn 超電導線材の開発」,低温工学 43 (2008) 15-22
- [3] A. Ballarino and L. Bottura: "Targets for R&D on Nb3Sn Conductor for High Energy Physics," IEEE Trans. Appl. Supercond. vol. 25, no. 3, 2015.

Cu-Sn-In 三元系合金母材を用いた Nb₃Sn 極細多芯線材における 超伝導特性と微細組織

Superconducting properties and microstructure of Nb₃Sn multifilamentay wires using various Cu-Sn-In ternary bronze matrices

<u>菱沼 良光</u>(核融合研);谷口 博康((株) 大阪合金工業所);菊池 章弘(物質・材料研究機構) <u>HISHINUMA Yoshimitsu</u> (NIFS); TANIGUCHI Hiroyasu (OAW); and KIKUCHI Akihiro (NIMS) E-mail:hishinuma.yoshimitsu@nifs.ac.jp

1. はじめに

取扱が易く高強度特性を有する Nb3Sn 線材の開発を目的 に、三元系ブロンズからの固溶強化による内部マトリックス強 化を検討している。これまで Zn を固溶した高 Sn 濃度 Cu-Sn-Zn 系について検討し、内部強化による高強度 Nb3Sn 極細多 芯線材を提案した。その結果、Zn は Nb3Sn 生成熱処理後の 母材中に均質に残存し、(Cu,Zn)固溶体を形成することで強度 を向上しており、内部強化の可能性が明らかになった。更なる 高強度化が見込める溶質元素として In に注目し、前報では 種々の Cu-Sn-In 三元系合金の微細組織や Nb3Sn 拡散相の 特性について報告した。本研究では、種々の Nb/Cu-Sn-In-(Ti)の極細多芯線材を作製し、微細構造及び超伝導特性に ついて報告する。

2. 実験方法

本研究では、Cu-10Sn-5In-0.3Ti (10Sn-5In)及び Cu-14Sn-2In-0.3Ti (14Sn-2In) の2組成のCu-Sn-In 合金を溶製し、600 ^oC の溶体化処理を実施した。その後、19 本の Nb 芯の多芯 線材を作製し、409 本を Cu 管に組み込むことで、Nb₃Sn 極細 多芯線材(Nb芯:7771芯、線径:0.90mm)を得た。同様の方法 で、16Sn-0.3Ti (16Sn) 母材線材も比較として用意した。これら の極細多芯前駆体を真空中で Nb₃Sn 生成熱処理を行った。

Nb₃Sn 生成熱処理前後の Nb₃Sn 相及び母材における微細 組織は、微小領域 XRD (100µm)及び FE-EPMA にて評価し た。Cu-Sn-In 母材における熱処理前後の硬度は、ビッカース 硬度計にて評価した。試験は 9.8mN (1gf)の荷重とし、任意の 5 箇所の硬度の平均値を硬度とした。

臨界電流密度(J_c)特性については、4.2K中で 18T までの 外部磁場を印加させて直流 4 端子法にて臨界電流(I_c)を測 定した。本研究における J_c 特性は、Cu部を除いた断面積で I_c 値を除した non-Cu J_c 値とした。

3. 実験結果

Fig.1 に各種極細多芯線材における熱処理後の母材領域 XRD を示す。比較基準として安定化銅部における図形も示し た。16Sn 母材のピークは、銅部のピークとほぼ同じ回折角で 得られることから Cu(200)と同定した。これは、母材から Nb3Sn 相生成のための Sn が母材から Nb にほぼ全量拡散し、母材 は Cu に相変態したと考えられる。一方、10Sn-5In 母材のピー クも 16Sn 母材と同様に Cu(200)と同定した。しかしながら、回 折ピークは低角度側にシフトしており、Cu の格子定数が長くな っていることを示している。これにより、In が母材中に残存し、 (Cu,In)固溶体を形成していると考えらえる。



Fig. 1 Micro-focused XRD in Nb₃Sn multifilamentary wires using 16Sn-0.3Ti and 10Sn-5In-0.3Ti alloy matrices after heat treated at 700 $^{\circ}$ C for 200h.



Fig. 2 Comparisons of the Vickers hardness between 16Sn-0.3Ti and 10Sn-5In-0.3Ti matrices before and after heat treatment for 200h.

Fig.2に各種極細多芯線材の母材における熱処理前後のビ ッカース硬度の変化を示す。一般的に、SnやInはCuの固溶 強化に寄与する溶質元素として知られており、熱処理前の母 材のビッカース硬度はほぼ同等であった。熱処理後ではSnの 拡散によって両組成母材ともに硬度は減少したが、全ての熱 処理温度において10Sn-5In母材にて高い硬度を示した。これ は、Fig.1 に示したように(Cu,In)固溶体が形成しているために 高い硬度になっていると考えらえる。このように、In は母材の 固溶強化機構の溶質元素としてだけでなく、超伝導特性を改 善することにも効果的であると考えられる。

本研究は、NIFS 核融合工学プロジェクト(UFFF036-1)、 NIFS 一般共同研究(NIFS16KECF017)、及び科研費(基盤 (B)16H04621)の支援を受けた。

内部拡散法 Nb₃Sn 線材における Zn 添加の効果 Effect of Zn addition for internal-tin Nb₃Sn conductors

<u>伴野信哉</u>(物材機構); 森田太郎(上智大,物材機構); 谷貝剛(上智大) <u>BANNO Nobuya</u> (NIMS); MORITA Taro (Sophia Univ., NIMS); YAGAI Tsuyoshi (Sophia Univ.) E-mail: banno.nobuya@nims.go.jp

1. 緒言

Nb₃Sn線材へのZn添加効果の研究は、1978年に遡る[1]。 和田博士、太刀川博士らによる、この最初の研究はブロンズ 線材への添加に関するもので、Ti添加効果が発見される前の ことであった。当該研究では、Zn添加がNb₃Sn層の成長を促 進することを確かめるとともに、ZnがNb₃Sn層に溶け込まず母 材に残留するという重要な知見を得た。その後、Ti添加効果 が発見され[2]、研究の精力がそちらへ注ぎ込まれることにな り、Zn添加の効果はその後大きな進展を見せなかった。

その後、世界的に内部スズ拡散法の開発が進み、Sn 固溶 限の問題が解決され、Nb₃Sn 線材の J。特性が飛躍的に向上 した。それと同時に、核融合炉や加速器などへの大型マグネ ット応用研究が進むにつれ、Nb₃Sn 線材の機械的特性が再び 大きな注目を集めるようになった。そんな中、2013 年初頭に 太刀川先生より内部拡散法 Nb₃Sn 線材への Zn 添加の研究 のご提案があり、太刀川先生と共に研究を進めさせていただ くこととなった。Zn が母材に残留し、固溶強化が望めるかもし れないという点が本研究への大きなモチベーションの一つと なった。

本発表では、Zn 添加の効果(特に元素拡散)を明らかにす るために、シンプルな拡散対構造を用いて得られた、元素拡 散挙動・ボイドの成長に関するごく最近の実験結果を中心に 報告し[3, 4]、Zn 添加の研究がどのような進展を見せているの かを紹介したい。

2. 実験方法

母材(Cu, Cu-15wt%Zn, Cu-12wt%Zn)となるロッド(外径/内 径=20/12mm)に外径 11.5 mm の Sn-1.6wt%Ti 芯を挿入し、伸 線加工により線径 0.6 mm の単芯線を用意する。これらを予備 熱処理なしで 210℃、400℃、550℃(昇温 2 h)の熱処理を行 い、組織形成過程を SEM、EDX 等で観察した。多芯線作製 の詳細については[5]を参照願いたい。

3. 拡散挙動

Fig. 1 に Cu/Sn-Ti 及び Cu-12Zn/Sn-Ti 界面の生成層の 温度変化を示す。両者で拡散挙動が全く異なっていて大変 面白い。210℃では、Cu 母材では Cu 側反応界面に ϵ 相が生 成するのに対し、Cu-Zn 母材では ϵ 相は生成されない。 400℃になると、Cu-Zn 母材では ϵ 相のさらに外側に β -CuZn 相と思われる層が形成された。興味深い点は、 ϵ 相には多数 のボイドが見られるのに対し、 β -CuZn 相は非常に密でボイド が全く見られない点である。ボイドの成長は Sn の母材全体へ の拡散を阻害する要因となるため、できる限り抑制することが 望ましい。拡散最前線で密な β -CuZn 相が形成されることは、 Sn の均一拡散にとっては非常に効果的と考えられる。Cu-Zn 母材では、550℃でも拡散反応領域に非常に密な ϵ + β 相が 広がっている。

Fig. 2 は、Cu 母材の 684 芯線と Cu-12Zn 母材684芯線の 550℃×100 h 後の BSE 像である。Cu 母材ではサブエレメン ト間だけでなくフィラメント間にも多数のボイドが形成されてお り、その外側への Sn 拡散が阻害されているのがわかる。一方、 Cu-12Zn 母材線ではフィラメント間のボイドはなく、サブバンド ル間のボイドもより外側に形成されており、Sn が ε 相の形でよ り広範囲に拡散している様子がうかがえる。



Fig.1. BSE images of reaction layer of (a) Cu/Sn-1.6wt%Ti and (b) brass (Cu-12wt%Zn)/Sn-1.6wt%Ti diffusion couples after heat treatment at 50 h/210 °C, 30 h/400 °C, and 10 h/550 °C.



Fig.2. SEM images of the microstructures of (a) Cu matrix 684-core wire and (b) Cu-12wt%Zn matrix 684-core wire after 100 h/550 °C (ramp up time to 550 °C: 24 h).

参考文献

- H. Wada, M. Kimura, K. Tachikawa, J. Mater. Sci. 13 (1978), 1943.
- K. Tachikawa, T. Asano T, T. Takeuchi, Appl. Phys. Lett. 39 (1981), 766.
- N. Banno, T. Morita, Z. Yu et al., submitted to SUST, 2019.
- 4. N. Banno, T. Morita, Z. Yu et al., submitted to JIM, 2019.
- N. Banno, Y. Miyamoto, K. Tachikawa, Physica C, 546 (2018), 55.

本研究の一部は JSPS 科研費 JP18K04249の助成を受けたものです。

東海大学における超伝導丸線開発

Development of superconducting round wires at Tokai University

<u>小黒 英俊</u>, 永澤 諒紀, 小野寺 裕紀, 長谷川 雄大, 藤原 淳, 鈴木 春菜, 肥村 康治, 小島 寛航, 小澤 優一朗, 山田 豊 (東海大) <u>OGURO Hidetoshi</u>, NAGASAWA Masaki, ONODERA Hiroki, HASEGAWA Yuta, FUJIWARA Jun, SUZUKI Haruna, HIMURA Koji, KOJIMA Hirokazu, OZAWA Yuichiro, YAMADA Yutaka (Tokai Univ.) E-mail: h-oguro@tsc.u-tokai.ac.jp

1. はじめに

東海大学には、太刀川恭治先生によって当時の工学部金属材料工学科に超伝導応用の研究室が立ち上がって以来、 様々な超伝導線材を開発してきた歴史がある。現在は材料科 学科と名前を変えているが、研究室はこれを引き継ぎ、様々 な超伝導線材の作製を行い、研究を行なっている。現在の主 な研究対象は、Nb₃Sn、MgB₂、REBCO であるが、これらの研 究の状況と最近の成果を報告する。

2. Nb₃Sn 線材

太刀川研究室時代より、A15 型超伝導体は活発な研究活 動が行われていた経緯があり、第3元素添加の効果やジェリ ーロール法の開発など、多くの研究、開発がなされている。た だし、ひずみ効果に関しては積極的には研究していなかった ようであるため、現在はひずみ効果に着目して研究を進めて いる。具体的には、第3元素が超伝導特性のひずみ効果に 与える影響を詳細に調べることである。これは、数年前に竹内 らが本学会で発表した、Ga 添加 Nb₃Sn 線材による耐ひずみ 特性の改善を目指した研究[1]と同じ目的で、物理特性そのも のを変化させることで Nb₃Sn のひずみ効果を低減させることが 最終目標である。1980年代に長村らによる測定例[2]があるが、 その後はこれに注目した研究はない。この測定結果では、Ti 添加 Nb₃Sn 線材のひずみ効果が小さくなっていることが観測 されている。これは、現在の実用 Ti 添加 Nb₃Sn 線材の Ti が、 上部臨界磁場のみならず、ひずみ効果にも良い影響を与え ていることがわかる。

我々の研究室では、さらに様々な元素を添加し、元素の 拡散の様子を観測して、Nb₃Sn への元素添加の効果を確認し ながら、ひずみ効果に関する研究を進めている。その添加元 素の中でも、特に Ge に注目している。Ge 添加 Nb₃Sn 線材は 太刀川研究室でも研究されており、特に 20 T 以上の高磁場 領域の臨界電流密度が大幅に向上することがわかっている [3]。また、GeはNb₃Snと拡散層との境界に析出することを、太 刀川先生よりご指導いただいている。この事実は、Nb₃Sn フィ ラメントを包み込むように Ge が析出することで、Ge そのものが 補強材となりうる可能性も秘めており、物理特性の変化ととも に、補強効果も期待できるとして研究を進めている。実際に試 作した、Ge1%添加 Nb₃Sn 線材の臨界電流の磁場依存性を図 1 に示した。線材の Nb₃Sn 層の厚さから臨界電流密度を比較 する必要があるが、Ge による Nb₃Sn の超伝導特性が変化す る可能性があることはわかった。Ge 添加 Nb₃Sn 線材および、 その他の第3元素添加 Nb₃Sn 線材のひずみ効果に関する詳 細は、1A-p09 および、1A-p10 で報告する。

3. MgB₂線材

MgB2線材の開発も、研究テーマの一つとして引き継いでいる。特に、MgB2はその臨界温度が39Kであることから、液体水素温度での応用が進められており、その一つに液体水素液面計への利用が挙げられる。センサー応用であるため、臨界電流の小さな線材が求められており、これを作製する技術を我々の研究室で山田研究室より引き継ぎ、MgB2細線の開発を行っている[4]。直径0.1mmのMgB2線材の作製を行

う必要があるため、直径 1 mm から加工を始めたとしても、加 工硬化による断線が頻繁に起こる。これを避けるために線引 きの途中で焼鈍を行なった。詳細な作製条件や作製した線 材の超伝導特性は、2P-p07 にて発表予定であるが、断線す ることなく容易に細線を作製することができるようになった。

4. REBCO 線材

REBCO線材は、coated conductor として非常に大きな臨 界電流密度を達成する線材として成功したが、これを超伝導 マグネットへ応用する試みは、成功例が少ない。これは、 REBCO 結晶配向のために薄膜として作っていることによる剥 離方向への弱さもあるが、最近では超伝導特性と熱伝導特性 との兼ね合いで起こる Hot spot の問題の方が大きいと考えら れる。これらの問題は、すでにいくつかのマグネット作製方法 で解決できるとされているが、我々はこれを材料の観点から考 え直すこととし、REBCO の丸線開発を行なっている。丸線材 が開発されることで、剥離問題は無くなり、周りに熱伝導の良 い金属を配置することで Hot Spot を起こりにくくすることも可 能であると考えられる。現状では、30 年前に研究されていた REBCO 丸線材[5]の臨界電流にも全く届いていない状況であ るが、現在進めている試みを紹介する。



Fig. 1 Critical current as a function of Nb_3Sn wires with and without lat% Ge addition.

謝辞

本研究は、東北大学金属材料研究所強磁場超伝導材料研 究センターの課題の一部として行われた。また、本研究は、東 海大学総合研究機構「研究奨励補助計画」、高度物性評価 施設、及びイメージング研究センターの支援を受け、実施した ものである。

- 1. 竹内ら、2011 年度秋季低温工学・超伝導学会概要 3D-a03
- 2. 長村光造、「超伝導材料」p.150
- 3. 例えば、佐藤学、「東海大学工学部金属材料工学科 1996 年度卒 業論文」など。
- 4. Y. Yamada et al., IEEE Trans. Appl. Supercond., Vol. 22 (2012) 6200304
- 5. K. Osamura et al., Supercond. Sci. Technol., Vol. 2 (1989) 111

Sn-Zn/Cu-Ti 層拡散反応 Diffusion Reaction between Sn-Zn and Sn-Ti Layer

 森田 太郎
 (上智大, NIMS);伴野
 信哉(NIMS);谷貝 剛(上智大)

 MORITA Taro
 (Sophia Univ., NIMS); BANNO Nobuya (NIMS); YAGAI Tsuyoshi (Sophia Univ.)

 E-mail:
 morita0079@eagle.sophia.ac.jp

1. はじめに

我々はこれまでに内部スズ法 Nb₃Sn 線材において,母 材に元素添加したときの Nb₃Sn 生成過程における拡散 挙動を研究し、線材の特性向上を試みてきた. これまで の研究から、Cu母材にZn添加することによってNb3Sn 生成が促進されることが確認されている [1]. 一方, Ti は 古くから超伝導線材の高磁界特性を飛躍的に向上させる 添加元素として知られている。最近の研究では Ti を母 材に添加した場合では, Nb 芯に添加する場合に比べ, 微 細な Nb₃Sn 結晶が得られることも報告されている [2]. こうした結果を踏まえると、結晶組織・特性の点から Nb 芯以外に Ti を添加することが望ましいが、Sn 芯に添加 すると、Sn 及び Ti 拡散過程で Ti リッチ相がサブバン ドル界面に形成され Sn 拡散を阻害する問題が顕在化し た. そこで新たに母材に Ti を添加することを検討した が, Zn があるために Ti 固溶量が大幅に制限される. そ こで, 今回新たに Zn は Sn コアに, Ti は Cu 母材に添加 する新しい複合構造を提案した。その効果を調べるため に、まず加工組織と Sn-Zn/Cu 拡散反応に関する基礎研 究を行った.

2. 実験方法

拡散対試料として、単芯の (Cu-x wt%Ti)/Sn-20wt%Zn 線材 (x = 0, 0.2, 0.5) を準備した.まず Ø20 mm の Cu-Ti 合金ロッドの中心に Ø12 mm の穴をあけ、そこに Ø11.5 mm の Sn-20wt%Zn を挿入した.この複合体をスエージ ング・冷間引抜加工によって Ø0.6 mm まで伸線を行っ た.伸線加工後、210°C×20、35、50 時間、400°C×10、 20、30 時間、550°C×5、10、20 時間の条件でそれぞれ 熱処理を行った.その後、反応相、拡散層厚等について、 SEM 観察及び組成分析を行った.

3. 実験結果と考察

図1に伸線加工前後のSn-20wt%Zn 組織を示す.Sn-Zn は共晶合金のため、加工前は典型的なデンドライト組織 を呈するが、冷間引抜加工によって Ø0.6 mm まで加工 すると、ZnがSn中に微細に分散した組織が得られる. 加工性は極めて良好である. 図2は Sn-20wt%Zn/Cu に おける、生成組織の時間変化を示した図である。これま での研究では, Sn-Ti/Cu 拡散対においては, 210°C 熱処 理時, 界面に ϵ 相が形成されることが報告されている [3]. 本研究の Sn-Zn/Cu 拡散対では、 すべての Zn が Sn から外側に向かって移動し、Cuに拡散して Cu-Zn 相を 形成した. また文献 [3] では, Cu-Zn/Sn 拡散対では e 相 は形成されず, η相のみが形成されることも報告されて いるが、Cu-Ti/Sn-Zn 拡散対ではそれとはまた異なる相 が形成されることも明らかとなった。組成分析からおそ らく γ-CuZn 相と考えられる. それ以上に温度を上げる と、拡散反応界面では、あたかも Sn/Cu-Zn の拡散反応 を生じているかのように振る舞う. このように, Sn-Zn

コアを用いた場合でも、ブラス母材線材と同様の Zn 効果 (Nb₃Sn 生成促進効果) が得られることが期待できる. 今後、Ti を Cu 母材に添加した際に、どのような拡散挙 動を示すか明らかにしていく.



Fig1: The cross section of Sn-20wt%Zn of Ø20 mm and Ø0.6 mm



Fig2: The cross section of Cu/Sn-20wt%Zn diffusion couple with non-annealed (left-top), $210^{\circ}C \times 50$ h (right-top), $400^{\circ}C \times 30$ h (left-bottom) and $550^{\circ}C \times 30$ h (right-bottom) heat treatment

参考文献

- N. Banno, Y. Miyamoto, and K. Tachikawa (2016), "Multifilamentary Nb₃Sn Wires Fabricated Through Internal Diffusion Process Using Brass Matrix," *IEEE Transactions on Applied Superconductivity*, 26(3), 3 – 6.
- E. N. Popova, I. L. Deryagina, and E. G. Valova-Zaharevskaya, "The Nb₃Sn layers formation at diffusion annealing of Ti-doped multifilamentary Nb/Cu-Sn composites," *Cryogenics.*, vol. 63, pp. 63-68, 2014
- N. Banno, T. Morita, Z. Yu, T. Yagai, "Effect of Zn addition and Ti doping position on diffusion reaction of internal-tin Nb₃Sn conductor," *Supercond. Sci. Technol.*, publishing

本研究の一部は<u>JSPS 科研費 JP18K04249</u>の助成を受け たものです。

Ge 添加 Nb₃Sn 線材の超伝導特性のひずみ効果に与える Ge の拡散の影響 Influence of Ge diffusion for strain effect of superconducting properties of Ge-doped Nb₃Sn wires

小野寺 裕紀, 永澤 諒紀, 長谷川 雄大, 小黒 英俊, 松村 義人 (東海大); 淡路 智 (東北大) <u>ONODERA Hiroki</u>, NAGASAWA Masaki, HASEGAWA Yuta, OGURO Hidetoshi, MATSUMURA Yoshihito (Tokai Univ.); AWAJI Satoshi (Tohoku Univ.) E-mail: 4bex1111@fuji.tokai-u.jp

1. はじめに

Nb₃Sn 超伝導線材は、実用超伝導線材として10 T 以上の 超伝導マグネットに利用されている。その Nb₃Sn 線材には、小 さなひずみで超伝導特性が大きく変化する問題[1]が残って おり、これを解決できれば、巨大な電磁力が線材に加わる強 磁場超伝導マグネットにとって、使いやすい線材が得られるこ とになる。

ここで、Nb₃Sn に第3元素として、Ti や Ta などを添加する と、マルテンサイト変態による臨界温度低下を抑制する効果 や、B₂向上の効果などによって超伝導特性が向上することが 分かっている[2]。これは、第3元素添加によって、ひずみ効 果そのものを変えることができる可能性を示唆している。実際 に、長村らによって過去に調べられた結果があり[3]、Ti 添加 によって臨界電流のひずみによる変化(ひずみ感受性)が小さ くなることが報告されている。ただし、このような研究は多くは ないため、ひずみ感受性を低減できる可能性のある元素は調 べきれていない状況にある。

そこで我々のグループでは、Nb₃Sn の Nb もしくは Sn と、少 量置換できる可能性がある元素を第 3 元素として Nb₃Sn に添 加して線材を作製し、ひずみと超伝導特性の測定を行うこと で、ひずみに強い Nb₃Sn 線材の作製を目指して研究を始め た。本研究では、第 3 元素として Ge に注目した。Ge は、過去 に高磁場での臨界電流密度向上の効果があることや、Nb と Sn の境界に析出することがわかっている[4]。このため、超伝 導特性の変化のみならず、Nb₃Sn フィラメントの境界に析出し て、フィラメントを機械的に保護する役目も期待できる。このた め、Ge を添加した Nb₃Sn 線材を作製し、Ge の拡散挙動と機 械特性を評価したので報告する。

2. 実験方法

Nb₃Sn 線材は、Powder in tube 法で作製した。外径 8 mm、 内径 5 mm の銅管に外径 5 mm、内径 4 mm の Nb 管を挿入 し、一方に蓋をして Sn と Cu と Ge の混合粉末を詰めた。Sn 量 は、Nb 管の体積から求めた mol 数に対し、Nb : Sn = 3 : 1 と して決定した。Ge は Sn 量に対して 0.5, 1 mol%として加えた。 管の残りの体積分は Cu の粉末で補い、これを混合して管に 詰めた。管を溝ロール圧延機とダイスによる線引き加工によっ て、直径 1.5 mm まで線引きを行い、これを 670°C x 100 h、真 空雰囲気で熱処理した。

作製した線材は、東北大学金属材料研究所強磁場センターの、片桐式低温強磁場中引張り通電試験機によって、臨界 電流のひずみ依存性を測定した。ひずみは、ひずみゲージ を表裏に貼ってたわみ成分を除去した状態で、引張りひずみ のみを測定した。線材長は40 mm、電圧端子間距離10 mm と し、4.2 K、18 T 以下、1 kN 以下の条件で測定を行なった。

作製した線材に対し、Nb₃Snの生成の様子と第3元素の分布を正確に把握するため、電子線マイクロアナライザー (EPMA)による組成分析を行なった。測定は東海大学高度物 性評価施設の島津製作所製 EPMA-1610を使用した。

3. 測定結果

Geを1%添加した Nb₃Sn 線材の臨界電流のひずみ依存性 を測定したところ、ゼロ磁場中において3A程度の臨界電流 であることがわかった。これは、Geが Nb₃Snの生成を阻害した ことが原因と考えられたため、電子顕微鏡による観察と EPMA による元素分析を行なった。Fig.1に、電子顕微鏡による熱処 理後の線材の、Nb 管と原料粉末界面付近の後方散乱電子 線画像を示した。これより、Nb₃Sn ができている層が非常に薄 いことがわかった。Fig.2には EPMA により測定した、熱処理 後線材の Nb と原料粉末界面の元素分析結果を示した。これ より、Ge が Nb 管と粉末の界面に集中していることがわかった。 また、Nb と Sn が重なる部分、つまり、Nb₃Sn が生成されている 部分が非常に狭い領域であることが分かった。

作製した線材を用いて、臨界電流とひずみの関係を測定 したが、0.2%のひずみで臨界電流が50%低下した。これが、ひ ずみ効果かクラックによる劣化を表すのか、引張り試験後の 試料の組織観察により、現在検討しているところである。この 結果に関しては、当日報告する。



Fig. 1 Back scattering electron image of the cross section for the Ge doped Nb₃Sn wire.



Fig. 2 EPMA composition mappings on the cross section of the 1% Ge doped Nb₃Sn wire.

謝辞

本研究は、東北大学金属材料研究所強磁場超伝導材料研 究センターの課題の一部として行われた。また、本研究は、東 海大学総合研究機構「研究奨励補助計画」、高度物性評価 施設、及びイメージング研究センターの支援を受け、実施した ものである。

- 1. J. W. Ekin, Cryogenics, Vol. 20 (1980) 611-624
- 2. M. Suenaga et al., J. Appl. Phys., Vol. 59 (1986) 840-853
- 3. 長村光造、「超伝導材料」p.150
- 4. 太刀川恭治、Private communication.

Hf または Ta を添加した Nb₃Sn 線材に対する超伝導特性のひずみ効果 Strain effect for Superconducting properties of Hf or Ta doped Nb₃Sn wires

<u>永澤 諒紀</u>,小野寺 裕紀, 鈴木 春菜, 肥村 康治, 小黒 英俊 (東海大); 淡路 智 (東北大) <u>NAGASAWA Masaki</u>, ONODERA Hiroki, SUZUKI Haruna, HIMURA Koji, OGURO Hidetoshi (Tokai Univ.); AWAJI Satoshi (Tohoku Univ.) E-mail: 8bajm030@mail.u-tokai.ac.jp

1. はじめに

Nb₃Sn 超伝導線材は、実用超伝導線材として 10 T 以上の 超伝導マグネットに利用されている。Nb₃Sn は、わずかなひず みでも超伝導特性が劣化してしまう性質を持っている[1]。とこ ろで、Nb₃Sn への第 3 元素添加によって、その超伝導特性が 大きく変わる事が知られている[2]。このことは、第 3 元素添加 によって Nb₃Sn 線材の超伝導特性に与えるひずみ効果を変 える事ができる可能性を示唆している。

本研究では、第三元素添加した Nb₃Sn 超伝導線材を作製 し、作製した線材の引張りひずみ下での超伝導特性を調べる ことを目的とした。本報告では、Hfまたは Taを添加した Nb₃Sn 線材を作製し、ひずみ効果を正確に測定できるのかどうか検 討した結果を報告する。

2. 実験方法

Nb₃Sn 線材は、Powder in tube 法を用いて作成した。外径 8 mm、内径 5 mm の銅管に、Hf 添加試料は外径 5 mm、内径 4 mm の Nb 管を、Ta 添加試料は外径 5 mm、内径 3 mm の Nb 管を挿入した。この一方に蓋をした状態で、Sn と Cu と Hf の混合粉末を詰めた。Sn の量は Nb 管の体積から求めた mol 数に対し、Nb:Sn=3:1 とした。Hf は Sn 量に対して 0.5,1,2mol% として加えた。管の残りの体積分は Cu 粉末で補った。Ta 添 加試料は、外径 5 mm、内径 3 mm の Nb 管を使い、その他は 上記と同様の方法で線材を作成した。Ta は 4%添加した試料 を作製した。作製した線材は 670°C x 100 hの熱処理を行な った。

熱処理した線材に、ひずみゲージを挟み込むように貼り付け、4.2 K、磁場中で臨界電流を測定した。また、引張通電試験機[3]によって、ひずみを加えた状態で、臨界電流を測定した。添加元素の状態を調べるため、熱処理した線材に対して電子線マイクロアナライザ(EPMA)を用いて、線材断面の組成分析を行った。

3. 結果、考察

Fig. 1 に、Hfもしくは Ta を添加した Nb₃Sn 線材の、臨界電流のひずみ依存性を示した。この結果からは、臨界電流の値、 および、磁場の条件が異なるので簡単に比較はできないが、 0.5%Hf 添加試料の臨界電流が 0.2%のひずみで 80%程度と、 著しく低下していることがわかる。4%Ta 添加試料は 0.1%が残 留ひずみとなり、0.55%まで引張ると臨界電流が 50%まで低下 する、典型的な Nb₃Sn 線材の臨界電流のひずみ依存性を示 している。この振る舞いの違いから、Hf 添加試料は Nb₃Sn の ひずみ効果ではなく、クラックの影響による劣化を観測してい ると考えられる。実際に、ひずみが 0.03%発生したところで、臨 界電流が低下した試料に対し、除荷して臨界電流を測定した ところ、臨界電流は戻ることはなかった。

上記の状態を改善し、ひずみ効果を観測できるNb₃Sn線材 を作成する必要があるため、線材断面の元素分析より、生成 されている物質の検討を行った。Flg.2に、Hfを0.5%添加した Nb₃Sn線材に対し、EPMAを用いて元素分布マッピングを行な った結果を示している。この結果から、Hfの量が0.5%と少なか ったため、その分布の様子を確認することはできなかった。Cu とSnに対して、Cuが多い領域とSnが多い領域とがあることがわ かった。これは、Cuが多い部分はCu-Snの固溶体であり、Sn が多い部分はCuとSnの化合物ができているものと考えられる。 中心部がこのように不均一な構成をしていることから、クラック が入りやすかったのではないかと考えられる。Ta添加試料も 同様の化合物はできているが、TaのSn拡散効果が大きいた めか、Nb₃Sn層とCu-Sn層の間にSnとNbの化合物層ができて おり、これがクラックの発生を抑制していることが考えられた。 断面組織などの詳細は当日報告する。



Fig. 1 Critical current as a function of a tensile strain for 0.5% Hf or 4% Ta doped Nb₃Sn wires.



Fig. 2 EPMA composition mapping on the cross section of the 0.5% Hf doped Nb₃Sn wire.

謝辞

本研究は、東北大学金属材料研究所附属強磁場超伝導 材料研究センターの課題の一部として行われた。また、本研 究は、東海大学総合研究機構「研究奨励補助計画」、高度物 性評価施設、及びイメージング研究センターの支援を受け、 実施したものである。

- 1. E. W. Ekin, Cryogenics, Vol. 20 (1980) 611-624
- 2. M. Suenaga et al., J. Appl. Phys., Vol. 59 (1986) 840-853
- G. Nishijima et al., IEEE Trans. Appl. Supercond., Vol. 20 (2010) 1391–1394

リアクト&ワインド法に有望な RHQT 法 Nb₃AI テープ状導体の研究 Investigation of RHQT-Processed Nb₃AI Tape Shaped Conductors Promising for React & Wind Method

 山田喬平(上智大);菊池章弘,飯嶋安男,瀧川博幸(NIMS);土屋清澄,王旭東,大内徳人,寺島昭男(KEK); 菱沼良光,高畑一也,三戸利行,今川信作,濱口真司(NIFS);小黒英俊(東海大);高尾智明(上智大)
 <u>YAMADA Kyohei</u> (Sophia University); KIKUCHI Akihiro, IIJIMA Yasuo, TAKIGAWA Hiroyuki (NIMS); TSUCHIYA Kiyosumi, WANG Xu-Dong, OHUCHI Norihito, TERASHIMA Akio (KEK);
 HISHINUMA Yoshimitsu, TAKAHATA Kazuya, MITO Toshiyuki, IMAGAWA Shinsaku, HAMAGUCHI Shinji (NIFS); OGURO Hidetoshi (Tokai University); TAKAO Tomoaki (Sophia University)
 E-mail: kyohei031425@eagle.sophia.ac.jp

1. はじめに

ヘリカル型核融合炉など複雑な形状の大型超電導磁石に 応用する超電導体には、NbTi 合金のようなハンドリングが求 められる。しかし、Nb₃Sn を代表とする高磁場用超電導体は、 延性がなく脆い金属間化合物であり、わずかなひずみの印加 で特性が劣化してしまう。このようなひずみに弱い化合物超伝 導体でも、Nb₃Al 系だけは例外的に耐ひずみ特性に優れて おり、長年、リアクト&ワインド法の適用が期待されてきた。過 去に原研(現量研機構)らの研究グループにより、拡散法 Nb₃Al 線材を用いたリアクト&ワインド法による大型ソレノイド 磁石の試作研究が行われたが、急熱急冷・変態(RHQT; Rapid-Heating/Quenching and Transforming)法 Nb₃Al 線材 は、拡散法線材より格段に高性能であるが、これまでリアクト &ワインド法を指向した線材開発は行われてこなかった。本 研究では、曲げひずみに対して有利なテープ形状の RHQT 法 Nb₃Al 線材を試作し、テープ化による臨界電流及び臨界電 流密度の変化等を検討した。

2. 実験方法

ジェリーロール法により Ta を母材として Nb/Al 多芯前駆体 を NIMS でインハウス製造した。フィラメント数が 222 本で、外 径が 1.36 mm の丸線材に対し、大気中で急熱急冷処理を施 して Nb/Al フィラメントを Nb-Al 過飽和固溶体合金に変換し た。近年、急熱急冷処理は安価で簡便な大気中で実施でき ることが判明している。急熱急冷処理した線材は、NIMS 材料 創製ステーションが保有する4段ロール圧延機を使用して、 直径 1.36 mm の丸線材を徐々に圧延し、途中段階の厚さで サンプリングしながら、最終的に厚さ 0.2 mm のテープ形状に 冷間加工した。その後、丸線及び圧延したテープ試料は、 800℃で 10h の追加熱処理を行って過飽和固溶体から A15-Nb₃Al へ相変態させた。超電導特性の評価については、 SQUID による磁化測定の他、NIMS 強磁場共用ステーション が保有する18T超電導マグネット及びハイブリッドマグネットを 用いて、最大 25T の外部磁場を印加して液体ヘリウム中 (4.2K)での臨界電流密度(Jc)の測定を行った。

3. 実験結果

Fig. 1 に測定温度 4.2 K、測定磁場 18 T での断面積減少 率とNon-Cu Jc の関係について示した。断面積減少率 10%以 上の圧延加工で Non-Cu Jc が 2 倍まで大幅に増加したこと がわかる。また、伸線加工では断面積減少率を大きくしても Non-Cu Jc が増加する傾向が見られるが、圧延加工では断面 積減少率 30%以降で Non-Cu Jc が低下する傾向が見られ た。これは、部分的フィラメントの異常変形が影響していると考 えられる。

さらに、曲率が異なる真鍮製治具に厚さ 0.2 mm のテープ 試料を沿わせて半田で固定して臨界電流の変化を確認した。 治具半径は 15~80 mm として測定を行なった。Fig. 2 に測定 温度 4.2 K、測定磁場 16~18 T での曲げひずみと臨界電流



Fig. 1. Comparison of non Cu Jc between Nb_3Al wire and tape as a function of area reduction ratio.



Fig. 2. Relationship between applied bending strain and critical current for Nb₃Al tape.

(Ic)の関係を示した。0.6%以上のひずみを加えても Ic の劣 化は一切認められなかった。

4. まとめ

本研究で RHQT 法 Nb₃Al 線材のテープ化による種々の特 性変化を検討し、リアクト&ワインド法の適用の有望性が確認 された。

謝辞

本研究の一部は、核融合科学研究所のH30年度LHD計 画共同研究からの支援を受けて実施した。